



協働的な学びの“落とし穴”

T 「今日の授業では、～について根拠を挙げながら自分の考えをまとめます。では早速、班になって話し合いますよ。」

S 「(内言) えっ、いきなり班になるの？ 自分の考えがまとまっていないのに…。まあ、いいかっ。僕たちの班にはA君がいる。彼に任せておけば、授業の最後の班ごとの発表も全く心配ないな。」



- ◆ 個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実による、学習指導要領の趣旨の実現が提言されてから、はや3年がたちます。ここでいう「趣旨」とは、学習指導要領に示された資質・能力の着実な育成、すなわち学力の向上です。
- ◆ 協働的な学びには、話し合いのほかノートを読み合いなどがあります。いずれも協働そのものが目的ではありません。目的は、多様なものの見方や価値観に触れたり、多面的・多角的に考えたりすることで、個々人の学びをより充実させることにあります。
- ◆ 表題の「落とし穴」の一つは、協働的な学びに先駆けて、個別最適な学びの充実を図らないこと。話し合いであれば、ICT等の活用により個々の子供に自己の考えをもたせることを怠ってしまうことです。もう一つは、子供たちが協働的な学びによって得られた成果を、自己の考えの再構築等に生かせないことです。
- ◆ 元来、「班の学力」など存在しません。協働的な学びは、子供一人一人の学力の向上につなげてこそ、価値をもつものです。

期待は超えるもの

大リーガー 大谷翔平

期待は応えるものじゃなくて、超えるもの。だから、周りが考える、そのもう一つ上を行けたらいいんじゃないかなど。

出典：「大谷翔平は、こう考える」（桑原晃弥著 PHP文庫）

※ 稀有のプロボクサーである井上尚也選手も「期待以上の試合をするというのが自分の中の一つのテーマになっている」と語っています。